

# 京都大学-香港バプティスト大学合同デザインスクール 実施報告

2014年9月12日 石田 亨, 村上陽平

## 1. 概要

京都大学での FBL/PBL, さらにサマーデザインスクールを経験した本科生 (修士 2 年) を香港に派遣し, 香港バプティスト大学の学生と合同でデザインワークショップを行うことによって, これまでに修得したデザイン理論やファシリテーションの手法の定着を図ることが本合同デザインスクールの目的である.

このイベントは沖縄でのデザインスクール (修士 1 年次が中心) の次の機会として設定するもので, 英語でのワークショップである点, 専門性を発揮することが求められるサステナビリティ (交通とヘルスケア) という地球規模の課題を対象とする点, 初めて状況を理解する海外でも問題発見, 解決を求められる点で難度が格段に高い. 博士課程でのフィールドインターンシップやリサーチインターンシップなど本格的な武者修行の前段としての位置づけるものである.

## 2. スケジュール

2014年6月12日 (木) ~6月15日 (日)

6月12日 (木)	関西国際空港から香港国際空港へ バスでランタオ島のフィールド調査
6月13日 (金)	ワークショップ
6月14日 (土)	各ワークショップでフィールドワークやアイディエーションを実施
6月15日 (日)	発表会 夕刻 香港国際空港から関西国際空港へ

### 【ランタオ島のフィールド調査】



於：天壇大仏



於：大壩

【ワークショップ】



【最終発表会】





### 3. ワークショップ

大都市の開発計画は、住人やビジネスマン、観光客、政府役人といった多くの利害関係者を考慮しなければならない。このような複雑な社会において未来に向けた問題解決策を発見するには、多様な分野の専門家の協働が必要不可欠である。また、利害関係者だけでなくその専門家間の対話も重要な要素である。さらに、その解決策は利害関係者によって理解されるように論理的に説明される必要がある。このワークショップでは、対話や論理的な手法を用いて、ランタオ島の開発計画をデザインすることを目的とする。

なお、事前準備として、香港バプティスト大学の学生が Asia World Expo の臨時副最高経営責任者へランタオ島の開発計画についてインタビューを実施している。質問は、各ワークショップのテーマに沿って両大学の学生が作成し、取り纏めたものを編集して作成した。インタビュー結果の要約は渡航前に各ワークショップのメンバに配布し、ランタオ島の現状に関する基礎知識を事前に共有した上で、それぞれのワークショップを実施している。各ワークショップの詳細は以下の通りである。

### 3.1. WS1: Exploring Geo-Tagged Photos for Culture Friendly Development

ファシリテータ：荒牧英治, William Cheung

メンバ：藤田弥世, 佐藤那央, Liu Kai, Gu Fangqing

本ワークショップの目的は、革新的かつ文化親和性の高い経済発展に向けた洞察を得るために、Flicker等のオンラインレポジトリ上の位置情報付き画像を検索し、その効果を調査することである。そこで、ランタオ島に似た背景を持つ世界中の島々（バリ島、バンクーバー島、トロント島、マウイ島等）について事前に調査し、それらの経済発展計画を整理した。さらに、それらの島の位置情報付き画像を検索し、各文化への洞察を事前に得た。ワークショップ期間中は、参加者の撮影したランタオ島の写真からランタオ島の文化的な特徴を抽出し、その特徴を他の島の特徴と対比した後で、参加者はランタオ島の新しい経済発展計画を、文化親和性を考慮しつつ議論を行う。

### 3.2. WS2: Vision and Design of Eco-Friendly Connectivity within/across the Intelligent Island

ファシリテータ：石田 亨, 村上陽平, Jiming Liu

メンバ：小椋恵麻, 堀 友彌, Liu Fei, He Jingzhu

本ワークショップの目的は、環境に優しいコミュニティを想像して計画を作成し、知的な交通基盤をデザインする（プロトタイプングをする）ことである。そこで、ある地域に焦点を当てて、その地域の輸送能力、遺産保護、環境保全能力、持続可能性などを対比してシナリオ分析を行った。分析時には、マルチメディアマインドマップ（freeplane等）を用いて、発見した事やデザイン案などを纏め、解決策を作成した。

### 3.3. WS3: Vision-Based Design Workshop: Looking into the Future by Looking Back the Past

ファシリテータ：中小路久美代, Haiping Lu

メンバ：古田幸三, 鈴木 綾, Li Yuanxi, Lou Jian

本ワークショップの目的は、現在と20年前（もしくは50年前）のランタオ島の日常を比較することで、今後20年後（もしくは50年後）のランタオ島の生活を想像することである。そこで、ワークショップ参加者は、まず日常の小さな出来事などを個別に十数個絵

を描き、現在、過去、未来からなるトライアングル図を作成した。その後、トライアングル図の未来の項目を収集し、参加者はそれら全てを矛盾なく紡ぐ一つのストーリーを描くことで、20年後（もしくは50年後）のビジョンを作成した。

### 3.4. WS4: Fieldwork Approach

ファシリテータ：北 雄介, Byron Choi

メンバ：北野清晃, 坂口智洋, Bao Qing, Yi Peipei

本ワークショップの目的は、香港の都市の文脈に焦点を当て、香港の資源と不足資源を明確にし、その不足分を補うようにランタオ島の開発プランを作成することである。そこで、フィールド調査を行い、香港の資源地図を作成し、それらと交通システム網を重ね合わせた。そこからランタオ島の開発計画を立て、ペルソナによって分析を実施した。

### 3.5. WS5: Design by Dialogues and Logical Methods

ファシリテータ：十河卓司, 樫木哲夫, Li Chen

メンバ：岡 隆之介, 市村賢士郎, Wenya Wu, Shan Songwei, Mai Guangcan

大都市の開発計画には、住人やビジネスマン、観光客、政府といった多様なステークホルダーが関与する。そのような複雑な社会の将来に向けたリーズナブルな解決策を見つけるために、本ワークショップでは専門家間の対話と論理的手法によって、開発計画をデザインした。具体的には、各自が事前に作成した開発計画案を説明し、他のメンバはアクティブリスニングによって発表者の興味や経験など背景を深く理解するよう努めた。その計画案をフィールド調査によって妥当性を検証し、最後に、産業界で用いられるコンサルテーション手法や発明手法といったクリティカルシンキング手法（MECE やピラミッド原理等）を用いた議論を通して、開発計画を作成した。

## 4. 参加者

<学生>21名

京都大学デザイン学本科生 10名

京都大学情報学研究科社会情報学専攻 1名

香港バプティスト大学 10名

<教員他>15名

教員13名（京都大学7名、香港バプティスト大学6名）

職員 2 名（香港バプティスト大学 2 名）

## 5. アンケート結果

本科生および教職員にアンケートを実施し、計 14 名から以下の回答を得た。

### 【質問】

ワークショップでの活動の内容と所感を、特に印象に残ったことを中心に記載。

### 【回答（学生 1）】

今回はメンバとしてワークショップに参加しました。結果としていくつかの賞をいただきありがとうございました。

私のチームは、ランタオ島～香港島、九龍半島のフィールドワークを中心に、とにかく街を歩き回りました。その際に、Resource、Lack、Idea、Memos という 4 つの視点から、気づきをマップに記述しながらまち歩きを行いました。このアプローチは、「①具体→②抽象→③具体」というシンプルな構成です。つまり、①フィールドワークで得た具体的事象を収集し、②カテゴリー化とメタキーワードの抽出を行い、③それらを踏まえた上での具体的なアイデアやプランの作成、という流れです。

最初に、参加者として振り返ると、当初は互いに第 2 言語である英語を使うことからコミュニケーションが取りづらいのではと思っていました。しかし、実際には第 2 言語であるが故に言葉以外の手段を駆使しながら心理的にも歩み寄り、よりチームの一体感が醸成されたと感じました。もちろん「日本人同士のワークショップであればもっと深い議論になった」という意見や、「もっと時間があればいい提案ができた」という意見も、散見されます。しかし、私は「言語の壁」と「4 日間という時間」は、そもそもの前提条件であったと思います。その前提の中で諦めずどこまで議論できたかが、様々な現場で活躍できるデザイン人材として必要なマインドであると感じました。

次に、ワークショップを客観的に振り返ると、ワークショップは決して万能なメソッドやアプローチではありません。必ず前提条件があることから、アウトプットはその条件下での試作品であり仮提案となります。しかし、1 時間であろうが 4 日であろうがとにかくサイクルを回し一度完成させてみるのが、ワークショップの本質なのだと改めて感じました。

最後に、全体を通じて、普段の研究活動を離れた環境でワークショップに参加することは様々なインスピレーションを与えてくれました。今後も積極的にデザインの場に参加したいと思います。今回は貴重な機会と時間をいただきありがとうございました。

#### 【回答（学生2）】

今回のワークショップでは **geo-tagged** をテーマに島の開発について議論を行ったが、約2日間のグループワークは目的が曖昧で終止方向性の定まらないものとなり、必然的に3日目のプレゼンもかなりレベルの低いものとなってしまった。成果やプレゼンに関してはともかく、プロセスとしての議論が有意義なものにならなかったことは極めて残念であった。原因として以下のようなことが考えられる。①今回の **geo-tagged** をテーマとしている理由が不明。②約3日間という短いワークショップにおいてプロセスが定まっていない。③ **geo-tagged** は方法なのか、それとも最終的な成果物なのかが分からない。特に②については、疑問に感じていながらもファシリテータに任せて作業に入ってしまった。

その結果、何となくディスカッションをして、フィールドワークに出て、プレストをして、無理矢理まとめるという、悪循環に陥ってしまった。これまでサマーデザインスクールや沖縄で同様のイベントを経験してきたが、この形式の短いワークショップは、やはりある程度設計されている必要があるように感じる。そこが不明瞭であるならば、まずは参加者全員でその点を議論し、参加者個々のバックグラウンドを出し合った、プロセスとしての議論が活きるようなワークショップをデザインするべきであった。それに気がつくのが遅かったことや、うまく切り出せなかったことなどは個人的に大きな反省点である。しかし今回のワークショップが自身にとって無意味なものであったかというとなんかそうではない。大きなつまづきや失敗から学べることも多い。バックグラウンドや意見の異なる相手とどのような状況においても円滑に議論を進めていくために、自身が何をすべきか、コミュニケーション能力の不足を含め、今後に繋がるヒントを得られたように思える。

#### 【回答（学生3）】

ワークショップでは主に2つの点で苦労したことが印象に残っている。1つは、日本と香港での、議論の背景となる知識の共有のむずかしさである。例えば、香港では日本のように地下鉄などのインフラが発展していないという問題があるという話を受けたが、香港に来たばかりの私たちにはその問題がどれほど深刻なものであるのかということ、彼らが訴えるようには理解できなかった。一方で、香港ではほとんどの国民が利用している共通のソーシャルネットワークサービス(SNS)が存在するため、共通の関心をもつ人々を集める

のは簡単だという話も聞いたが、こちらにも日本に似通った SNS が存在しないためにわかには信じがたかった。それぞれの文化圏で問題だと感じていることを、短時間で共通するための手段が必要になると感じた。

もう 1 つは、お互いに英語を用いて議論をした点である。瑣末なレベルの問題としては、相手の発音を理解するのに時間がかかったという問題がある。一方、より難しいと感じた問題は、両国で 2 人ずつ輩出しての議論となったため、うまく英語で話せないときにもう 1 人の同僚に母語でその内容を伝えてしまうことである。こうした内言語のコミュニケーションは、異文化コミュニケーションの場においては、相手の集団に対して排斥意識を与えてしまうのではないかと感じた。

#### 【回答（学生 4）】

今回のワークショップでは、非常に沢山の課題の発見があった。

まずは、何といっても言葉の壁である。互いに言語が違う者同士がワークショップをするためには、英語を使いこなすことが必要不可欠である。この点について、事前に会話を中心とした英語力強化を図る機会を何らかの形で設けるべきであったと痛感している。

次いで、言葉の問題により意思疎通が完全に出来ないことが事前に分かっていたにも関わらず、ワークショップが行われる前に、テーマによってあぶりだしたい問題と、それに対するアプローチの仕方を先方のチームとメール交換等によりきちんと話し合っていなかったことが非常に悔やまれた。とりわけ、どういう方向性でいくのか、何を持ってこのワークショップのゴールとするのかについて非常に漠然としたままワークショップをスタートさせてしまったため、言葉の壁も相まってチーム内でうまく歩調を合わせられず、非常に不本意な結果に終わってしまった。今回のように、非常に限られた時間の中でワークショップを行うためには、自分たちの方向性とそれに対するアプローチ法、及びゴールに向けたステップは事前に固めておくべきであることを学んだことは、非常に有意義であった。

最後に、自分の弱点をしっかりと見つめなおす良い機会となった。個人的なことであるため、自分の弱点についてはここでは述べないが、今一度自分で反省し、次に生かしていきたいと思う。

#### 【回答（学生 5）】

今回のワークショップでは香港バプティスト大学の学生・教員とチームを組み、香港域最

大の島であるランタオ島の現状をフィールドリサーチにより探り、将来的に如何に人々をランタオ島に惹き付けるかを議論し、そしてその具体的な方法の提言を目指しました。

ランタオ島は香港の観光地として有名であり、海外との玄関口である香港国際空港を備えています。本土のダウンタウンと比べると観光客の数は多くありません。その理由を探るために私たちは公的資料を基に議論を行い、結果として本土とランタオ島間での「経済格差」が集客力の違いの原因であり、「公共設備の差」、「教育の質の差」、「就職口の数の差」がこの経済格差を産んでいるのではないかと推測に至りました。そこで、島の中でも海外からを含めた移住者がディスカバリーベイという地区の人々に聞き取り調査を行い、島の現状と島で生活する上感じる生の声を集めました。その結果を基にしたランタオ島の自然を活かした島を横断するトライアスロンなどのアクティビティの実施や、人々が生活する上で各地区に必要な新たなインフラ設備（交通網、ショッピングセンター、学校、ゴミ処理場などの公共施設）の提言などを、似た境遇にある「関西国際空港と泉佐野市」の実例なども用いて行いました。

活動中は英語でのコミュニケーションが必要だった事もあり、香港側のグループメンバーとの意思疎通の難しさや、作業を進める過程でのすれ違いなどを多く経験しました。しかし、熱心にこちらの考えを理解しようという姿勢を常に向けてくれたため、共に協議した内容がある程度の形として提示する事が出来ました。よって、今回のワークショップは初の国外学生との議論の場としては有効に働いたのではと感じています。

#### 【回答（学生6）】

わたしは、現在、異文化、異分野協働のファシリテーションについて研究しています。今回のワークショップは国籍と専門の違う人々が協力して、学際的な島開発ソリューションを考えるワークショップであるため、研究の素材を収集することを目的として、今回のワークショップに参加させていただきました。アシスタントファシリテーターとしてうちのグループに入りますので、直接にディスカッションに参加していたというわけではなく、第三者の視点からディスカッションの流れ、個人個人の発言や行動などを観察しました。うちのワークショップに参加したのは情報学と心理学の学生であるため、観点を理解できない、話がかみあわないという問題を想定して、ダイアログ、つまり、積極的な話し合いを通じて、アイデアの背景、本人の思いをお互いに理解してもらうようになる方法を使いました。ワークショップの経過から見ると、一定の効果がありました。しかし、その中でも、合意になっていない時がしょっちゅうありました。ぎりぎりに最終ソリューションができました。この合意できない原因をいま、取っていたビデオを見ながら、徹底的に分析

しています。その原因を突き止めて、異文化、異分野協働のファシリテーションのノウハウや支援ツールに努力しています。今回のワークショップの分析を通して、デザインスクールの今後の異文化、異分野協働に役に立てばと思っています。

**【回答（学生7）】**

今回のワークショップでは、アイデアを拡散する段階ではグループのコンセプトや方向性の共通認識を形成しつつうまく進められていたのに、最終段階でアイデアを収束させるときになって意見の食い違いが生じたことが印象に残った。

原因として、言語の壁は多少あったかもしれないが、それ以上に参加者の専門性の違いが大きかったように思う。各分野における普段の研究やプロジェクトでのゴール設定やアウトプットの仕方を互いに理解できていなかったために生じた結果であると考えている。

各参加者のアイデアをうまく共有することで、問題解決の方向性をそろえることはできるが、最終的な落としどころをどこに持っていきたいのかに関するそれぞれの立場まで事前に共有しておかなければ、せっかく話し合ってきたことの着地点を見失ってしまう。この教訓を得られたことが本ワークショップでの一番の収穫であった。

**【回答（学生8）】**

ランタオ島の50年後を考えるとというテーマに沿って、私たちのグループは現在のランタオ島、自分が住んでいる身の回りの建物、モノなどを事前に考えた。そして、フィールドワークとして、香港の歴史博物館にいき、50年前の香港島やランタオ島での暮らしを学んだ。それらの中から、過去と現在で変わったもの、変わっていないもの、普及したものは何かを考えた。この比較を通し、50年後の未来がどのようになっているか、どのようにしたいかを考えた。ワークショップ全体を通し、写真や絵を描くことで参加者の共通認識を深めた。絵を描くというシンプルな動作で、お互いの認識を深められたことは初めての経験であった。そして、一貫してこの作業をすることで、最終的なアウトプットに繋がられるということも驚きであった。そのようなファシリテーションを学ぶことができた点が今回の大きな収穫であったと感じている。

**【回答（学生9）】**

デザインスクールでワークショップは何回かやったことがあったものの、今回は海外でしかも現地の地域開発に関するテーマであったため結構緊張して望んだ。私の班は前半はフィールドワークで実際に人や土地を見て回り、後半はそこから得られた知見をもとに問題にアプローチする手法を取った。

前半のフィールドワークは、初めての香港ということもありとても楽しみにしていた。香港については日本で色々調べていたのだが、やはり実際に歩いてみると写真や文では伝えきれない活気や何気ない文化に触れ合うことができとても楽しかった。また現地の学生や先生方がフィールドワーク中様々な解説をしてくださり、現地目線での見方も知ることができたのは今回ならではとても有意義であった。

後半は大学に籠もって、将来の街の在り方について体験したことをベースに議論した。初めは田舎と都会といった単純な二元論に落としこんで問題を単純化しようとしてみたりして、問題の切り分け方を様々な観点から模索した。英語で自分の言いたいことを言うのは難しく、なかなか思うようにはできなかったが、相手も理解しようと熱心に耳を傾けてくれたのは嬉しかった。結局最終日の朝まで議論は続き美しい答えは出なかったが、机上の理想論だけで終わらぬように実際の体験に基づいた考え方に徹するよう努力できたのは良かったと思う。

本ワークショップでは、デザイン手法を学べたことはもちろん、香港の学生と一緒に街を歩き一緒に考えることで、当たり前と思って無意識に見過ごしていたものに気付く機会を得られたのがとても勉強になり楽しかった。また次回があれば是非参加したい。

#### 【回答（学生 10）】

今回のワークショップでは実質 3 日間という短い期間ながら、フィールド調査をベースとした具体的な案を提案することができたように思う。特に今回印象に残ったのは、ディスクバリーベイにおける現地住民への聞き込み調査である。通常の WS では住民にとって良い点や悪い点を客観的な想像の中で語ってしまうことが多い。しかし、今回の WS では生の声を聞くことにより、直面する問題に対して一層身近に考えることで、将来の計画やフィナンシャルの面など細かな案を提案することができたのは非常に有意義だったと思う。英語での飛び込みインタビューは断られることも多く、かなり緊張したが、優しく了承してくださる現地の方々と現地の学生、ファシリテータの先生方との協力で上手く行ったと思う。

#### 【回答（村上陽平）】

今回のワークショップでは、シナリオ分析のアプローチを用いて、環境に優しいコミュニティをデザインすることが目的であった。当初、京大側のメンバが問題発見から行おうとするのに対し、香港側は情報システムの提案を行おうとしたため、双方の間で軋轢が生じ、互いにフラストレーションがたまる出だしであった。このような状況に対して、学生から

は京大メンバ、香港メンバで分かれて考えを整理したいとの要望があったが、両者の溝が深まることを恐れて、香港側を説得する形で問題の整理から行った。振り返ってみると、学生にとっては英語でのワークショップという初めての経験であったため、まず初めに各自の母語で双方の考えを整理した方が、お互いの意図のより早い理解につながったように思う。この辺りは自分のファシリテーションの経験不足を痛感した。

二日目は、同じランタオ島でも洗練された地域である Discovery Bay でフィールド調査を行い、その結果を踏まえて大澳の再開発プランをデザインした。具体的には、Discovery Bay に住む多様なステークホルダー（住人、家政婦、観光客等）にインタビューを行い、各ステークホルダーにとっての Discovery Bay の長所と短所を収集し、その内容を基に作成したシナリオを大澳に適応させて、大澳の環境でそのシナリオを評価した。机上での議論よりも、現場を見ることの方が双方の意識合わせには効果的で、その後の議論を加速させることになった。フィールドの持つ潜在的な力を目の当たりにするにあたり、一日目の議論を早めに切り上げてまずはフィールドに出るべきだったと反省している。

なお、類似した成功ケースを基に、対象ケースと成功ケースの環境の比較を行い、成功ケースのシナリオを対象ケースに適応させて新たなシナリオを作成するアプローチは、自ずと環境の差分に着目するようになり、議論の発散を防ぎ、短期間のワークショップでは非常に効果的であったと感じている。今後は、このアプローチを活用しつつ、各自の専門性を引き出して多様な解決策へと導けるように、今回の経験を生かしていきたい。

#### 【回答（石田 亨）】

2013年11月に「デザインスクール in 沖縄」を行ったが、その帰路、参加した学生に海外編はどうかと訪ねたところ、意外にも希望者が多かった。英語力に不安を持つ学生が多いにも関わらず、こうしたチャレンジに前向きなのがデザイン学の学生の特徴だろう。

海外と言っても、予算に限りがあり遠くには行けない。また、修士論文などの研究活動に、大きな影響を与えないためにも近隣が望ましい。近隣諸国で英語圏で、かつデザイン学に興味があるという自ずから限られてくる。さらに、初めての試みを短い準備期間で実現するには、信頼関係が既にあることが前提となる。そこで、香港バプティスト大学の Jiming Liu 教授に相談すべく 12月に香港に飛んだ。

Jiming Liu 教授とそのグループは、データ解析を用いて社会システムを分析し、医療分野

を中心に政策提言を行っている。オープンマインドで質の高い研究が行われていて、個人的にも長いお付き合いがある。予想した通り、話は瞬く間にまとまり、半年後の実施が可能となった。ランタオ島の再開発という壮大なテーマは先方からの提案で、5つの異なるメソッドでアプローチするというのは京大の提案である。

初めての実施には困難がつきものだ。不透明な状況に慣れていない学生にはストレスであったかもしれないが、こうした経験を通じて国際的に仕事をする肝を作って欲しい。発表の質は十分であったとは言えないが、発表に至るプロセスは良いトレーニングになった。教員も学ぶことが多かったと思う。

先方には、滞在中、本当によくして頂いた。今年の実験を反芻し来年をどうするかを考えたい。仮に京都で実施することになった場合、あれほどのおもてなしができるかどうか不安だが、良い関係を今後も持続できればと思う。

#### 【回答（中小路 久美代）】

自分の担当したグループでは、こちらが示した極めて具体的な作業手順を介して、デザイン的思考を深く行い、質疑を通じたディスカッションでそれを言語化（今回の場合は英語）していくという過程に、参加学生たちは全員真摯に取り組み、非常に効果的なワークショップとなったと考えている。また、HKBU-京都大のそれぞれ一人ずつの学生からなる混成チーム2グループを構成したことで、学生にとっては自主的に関わらざるを得ない環境となり、結果として非常にうまくいったと考える。何よりも、相互尊敬の念が培われたことを嬉しく思った。HKBU側の若手教員、学生のひとりずつからも丁寧な感謝のメールを頂いたことも嬉しかった。

今回は英語でのワークショップということであったが、HKBU側の学生はmain land china出身が多く、英語力に関していえば京大の学生と同程度であり、言葉を駆使する力による違和感がなかったことは良かったと思う。

一方で、ワークショップの運営面では改善の余地があったように思う。例えば、ワークショップの趣旨に関して、「ランタウエリアの再開発という題目を題材としてデザインのアプローチを学ぶ」とするのか、「ランタウエリアの再開発問題を解決する」とするのか教員側や評価委員側で共通認識を持つ必要があったように思う。また、5つの賞が準備されていたが、5チームがあった時点で、日本的にはそれぞれのチームに各賞がいくのかと考え

るが、結果的にはそうではなかった。真剣なコンペではないので、学生のやる気や、インセンティブをきちんと返すことは、ワークショップを学習の場としてデザインする側としては重要であろう。

【回答（十河 卓司）】

「対話によるデザイン」というアプローチで解決策の提案を試みた。各自の専門性を背景として、問題意識と解決策のラフなアイデアを事前に考えてくるよう依頼していたのだが、1日目は「傾聴」を心掛けつつそれらを全員で共有し、そこからビジョンを策定していった。さらに、香港の一般の人々の考えていることを探るため、夕方、2グループに分かれて香港の街に繰り出し、地元の人や観光客に、香港や Lantau 島の印象などについてインタビューを行い、自らの問題意識の裏付けを得た。2日目は、1日目に策定したビジョンの実現に向けて、課題を整理した後、最初のステップとして取るべき解決策をブレインストーミングや KJ 法などの手法を使いながら策定していった。

今回のワークショップで印象に残ったことの一つは、自分たちの日常の文化では想像が及ばない問題を扱うことの難しさである。具体的には、中国本土から香港への移民についての議論になった時、彼らのコミュニティの周囲からの断絶、マンダリンと広東語の問題、一部の住民のマナーの悪さなどについて、立場の違う香港の学生同士がヒートアップしてしまったのだが、私を含む日本人には実状がわからず、議論に入ることができなかった。最終的には、移民を含む Lantau 島民の教育のためのいくつかの解決策のアイデアを提案するという方向性でチーム全員がまとまることができ、ひと安心したが、このような状況でも上手くファシリテートすることの重要性を痛感した出来事であった。